特定非営利活動法人日本栄養改善学会　関東・甲信越支部会
第 2 回現場で活躍する管理栄養士・栄養士のための実践栄養学研究セミナー
　－初めての論文執筆編－　実施報告

荒井　裕介[*1*2]、石見　佳子[*3*4]
[*1] 関東・甲信越支部実践栄養学研究セミナー担当、[*2] 千葉県立保健医療大学、[*3] 関東・甲信越支部長、[*4] 国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所

関東・甲信越支部では、2018 年 10 月～2019 年 3 月にかけて、論文執筆を目標とした実践栄養学研究セミナーを、女子栄養大学駒込校舎を会場に計 4 回開催した。

本セミナーのテーマは､「実践現場で得たデータを使って論文を執筆しようーはじめての論文執筆に挑戦－」とし、論文を執筆したことがない実践現場で活動する方を対象に、日頃の疑問解決や業務評価等を目的に、現場で蓄積したデータを用いて論文執筆を目指す内容とした。実施方法は、現場の管理栄養士・栄養士の方の発表・報告スキルを少人数制の演習形式で担当チューターが論文執筆のサポートをするものとした。

セミナー期間中は、受講者が執筆するテーマに応じた既存データを用いて、論文執筆を行った。執筆論文は途中 2 回、担当の正副チューターが精読し、査読さながらにアドバイスコメントを文書としてまとめ、その内容を参考に、受講生が論文をブラッシュアップする流れとした。

1. 開催場所
女子栄養大学駒込校舎

2. 参加費
支部会員 15,000 円、他支部会員 20,000 円

3. 受講者
受講者は 6 名（うち他支部 1 名）であった。受講者のうち 5 名が、2017 年に本支部が開催した学会発表を目標とした初級編セミナーの参加者であった。受講者の職域は、行政 3 名、学校 1 名、健康増進施設 1 名、大学教員 1 名であった。
受講者全員が全日程を受講し、論文の執筆を行い、修了した。

4. チューター（順不同、敬称略）
石田 裕美（女子栄養大学）、塩原 明世（国際学院埼玉短期大学）、小澤 啓子（女子栄養大学短期大学部）、黒谷 佳代（医薬基盤・健康・栄養研究所 国立健康・栄養研究所）、谷内 洋子（千葉県立保健医療大学）、新保 みさ（長野県立大学）、木村 典代（高崎健康福祉大学）、荒井 裕介（千葉県立保健医療大学）

5. 日程
第 1 回　2018 年 10 月 20 日（土）10 時～16 時

【演習】論文執筆する内容の発表
【講義】先行研究のまとめ方
【講義】研究（活動）計画作成のポイント
【講義】論文執筆のポイント
【講義】結果評価ポイント、統計手法の選択と記述の仕方
【演習】チューターと執筆の方向性の整理
第 2 回　2018 年 12 月 22 日（土）10 時～16 時
【講義】論文投稿から掲載までの実際
【講義】編集委員会とのやりとりの実際
【演習】執筆論文への助言と推敲
第 3 回　2019 年 2 月 11 日（月・祝）13 時～17 時
【演習】論文のブラッシュアップ
第 4 回　2019 年 3 月 17 日（日）13 時～17 時
【演習】成果発表会
修了証の授与

6. 受講者アンケート

事後アンケート（無記名）は 5 名から回答を得た。主な意見は表 1 のとおりである。

表 1　受講者事後アンケート結果

受講した感想	「良かった」4 名、「まあ良かった」1 名
執筆論文の投稿意思	「投稿する（したい）」4 名、「わからない」1 名
新たな論文執筆意思	「思う」3 名、「まあまあ思う」1 名、「あまり思わない」1 名
セミナーを受講して成長したと思う点	・業務と両立した進め方 ・先行研究のまとめ方、考察の書き方 ・現場の栄養士でも論文を書けるようになれると強く思ったこと ・論文の中に業務にいかせることが多くあることに気づいたこと ・論文を読んで業務に生かそうと思ったこと ・論文を書いてみようと思ったこと
セミナー内容、運営への意見	・講義内容がすばらしかった。 ・チューターの指導が手厚かった。 ・2 人のチューターから異なる視点でアドバイスをもらえて良かった。 ・最後の回が年度末となり、仕事が繁忙期で執筆が厳しい。 ・会場はアクセスが良く、パソコンも使えて良かった。
受講料	「適当」1 名、「やや安い」3 名、「安い」1 名
その他意見	・セミナー参加が論文執筆するきっかけになった。 ・受講した自分が後輩達を後押ししたい。 ・学んだことを次の実践につなげたい。

	・セミナーを継続して欲しい。 ・統計やプレゼンのコツを勉強できるセミナーがあると良い。

7. チューターアンケート

事後アンケート（無記名）は 5 名から回答を得た。主な意見は表 2 のとおりである。

表 2　チューター事後アンケート結果

受講者が成長したと思う点	・論文執筆の流れが見えたのではないか。 ・目的を定め、方法や結果の整理から、自分の伝えたいことは何を考え、人に伝えるためにはどうしたらいいのかという視点で考えられたのではないか。 ・熱い思いを論理的に記述する方法が分からないように思ったが、セミナーの回が重なるにつれて、自身の研究目的が明確になり、文章も論理的筋道が通るようになったこと。 ・自身の思いの主張だけでなく、論理的に考え、整理する力。 ・先行研究を調べる力。 ・論文の形式として記載する力。
受講生の指導で大変であったこと、困難であったこと	・受講当初のモチベーション維持 ・受講者一人一人の状況や知識、スキルが異なっており、チューターに何を求めて、何ができるのか、どのレベルまで目指すのか把握していくことが難しかった。 ・実践活動報告としての論文の在り方に自分自身の迷いがあった。ケースバイケースが多く、既出の論文に沿って書くことが難しいと感じた。 ・講義の準備。 ・2 つの論文に短い期間でコメントをしなければならなかったこと。
セミナーで良かった点	・実際に論文を一通り書いたことが良かった。受講者は講義を聴いてわかったつもりでいたが、実際に書いてみるとわからないところがたくさんあったと話していた。この経験が自信に繋がり、次の論文執筆へと進めると思う。 ・マンツーマンでじっくり指導することができた。お互いに時間を十分に取り、集中して取り組めた。 ・自分自身も文章を読み、書くことの大切さを再確認した。 ・受講者の真摯な姿勢を見て、自身の研究への取り組み方を問い直す機会となった。 ・受講者から多くの刺激をもらった。受講者と交流するなかで、実践報告を増やしていく必要性を感じることができた。 ・他チューターとの関わりの中で多くの学びがあった。

今後のセミナーでは改善した方が良い点	・受講者の増加に向けて、周知方法や参加しやすさを探っていけると、会員に執筆スキルを還元し、学会全体の発展につながるのではないか。 ・講義受講人数が少なく、もったいなかった。講義のみ広く公開しても良いのではないか。 ・論文は著者が書き終わって終わりではなく、投稿し、査読を受けて掲載されるまでにも長い道のりがあるので、そこまでフォローし続けられるような仕組みや体制があると良い。 ・有意義なセミナーだがチューターや担当幹事の負担が大きい。セミナーの方向性や内容を整理する必要があるのではないか。最終目標が栄養学雑誌掲載であれば、数年後の実現に向けた長期計画なのか、今年度中に実現させるべきなのか不明確なので、リクルートの仕方、セミナー企画も立てにくいと感じた。 ・チューターの負担が大きいこと。全国の支部で講義資料を統一して作成すると、負担感は減らせると思う。 ・チューター補助として、大学院生など論文を書いたことのある学生に手伝ってもらえると、相互に勉強になり、負担も軽減できるのではないか。 ・受講者のレベルをもう少し事前に把握したい。

8. 今後に向けて

受講者は全員が論文執筆を終え、修了することができた。受講した感想も「良かった」（4 名）もしくは「まあ良かった」（1 名）と回答があり、有意義なセミナーになったと思われる。しかしチューターからは負担が大きかったとの声があった。そのため提案のあった意見を参考に、負担を軽減し、継続して開催できる仕組みを検討していく必要がある。また今回は 12 名の募集に対して 6 名の受講者であった。受講者数はセミナー運営面にも影響するので、多くの会員が参加できる仕組みや企画の検討が必要である。

今回のセミナーは論文執筆が目標であるが、論文として掲載されるまでには、さらなる推敲や、投稿、査読とプロセスが続き、受講生は対応していく必要がある。そのため、セミナー後も継続的な支援が必要と考えるが、チューターが支援し続けるには限界がある。モチベーションを維持し、投稿、掲載までつなげるためにも、支援の仕組みや体制づくりも課題である。

また受講生に卒業論文執筆の経験がない方もおられ、執筆の手順が分からないという不安の声があった。実践現場の方々を対象に学術総会等でセミナーを開催し、執筆支援を行うことはアンケートからも有意義であると考える。その基礎として、卒前教育で実践者が論文を書く意義を学び、研究計画を立てて論文を執筆する経験をすることも重要であると考える。

最後に本セミナーを開催するにあたり、チューターを務めていただいた先生方をはじめ多くの方々のご指導とご協力を賜りました。お礼申し上げます。